

児童サービス論におけるアクティブラーニング

—グループワークと全員参加型のルーブリックによるパフォーマンス評価—

坂下直子

1. はじめに

1. 1. 児童サービス論の歴史

我が国において児童図書館学の教育がスタートしたのは、1921（大正10）年に文部省図書館員教習所が開設され、「管理法一般」の科目の中で、「児童図書館」についての講義が実施された時点である¹⁾。

その後、1941（昭和16）年に「児童図書館管理法」が独立の科目として設置され、児童図書館学科目が専門分化された²⁾。

戦後、図書館法が1950（昭和25）年に公布され、司書講習（全15単位）の中の必修科目として「児童に対する図書館奉仕」（1単位）が施行規則で定められた。1968（昭和43）年の図書館法施行規則改正でこの科目がいったんは「図書館活動」（2単位）に吸収され、別に「青少年の読書と資料」（1単位）が選択科目としておかれたものの、その機能の不充分さが浮き彫りになり、児童サービスについて十分な知識をもたない司書が養成されることとなった。

これを教訓として、各方面から専門職としての児童図書館員養成のための児童図書館科目を必修化せよとの要望が出され、悲願の末ついに1996（平成8）年、司書講習（全20単位）の必修科目として「児童サービス論」（1単位）がおかれた。

さらに様々な働きかけにより、2012年の新カリキュラムにおいて、「児童サービス論」は1科目2単位に昇格した。

1. 2. 児童サービス論の使命

これからの図書館の在り方検討者会議が平成21年2月に報告として出した「司書資格履修のために大学において履修すべき図書館に関する科目の在り方について」には、

「児童（乳幼児からヤングアダルトまで）を対象に、発達と学習における読書の役割、年齢層別サービス、絵本・物語等の資料、読み聞かせ、学校との協力等について解説し、必要に応じて演習を行う。」と記されている。

また、2012年の新カリキュラムから1科目2単位となった児童サービス論について、「子どもの読書活動の推進の観点から『児童サービス論』の内容について、子どもの読書の意義の明確化を図り、2単位に充実した。」としている。

このことから、必修科目として課せられた使命に基づき、それを遂行するための工夫が必要であると考えた。

1. 3. 高等教育における教授・学修・評価形態

近年、高等教育機関において注目され、推奨されている教授・学習法のひとつにアクティブラーニングがある。

文部科学省の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」によると、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者

が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブラーニングの方法である。」と定義されている。アクティブラーニングは、今や初等中等教育にも派生し、実践と研究の対象となっている。

さらに、松下・溝上による「ディープアクティブラーニング」の提唱も見逃せない。ここでは、ただ単に、はいまわるだけのアクティブな学習ではなく、より深く思考を展開させ得る内容が求められている。

従来からの教壇より知識を教えるトーク&チョークの教授形態に加えて、受講生の修得をよりスムーズにならしめる、今日の学生に合った手法であると考えられる。

また、ウィギンズとマクタイが提唱し、教育界において浸透してきている有効な学習・評価方法の一つに、パフォーマンス課題とルーブリックによる評価がある。

パフォーマンス課題とは、リアルな文脈の中で、様々な知識やスキルを応用・総合しつつ何らかの実践を行うことを求める課題である。具体的には、論説文、レポートや新聞といった完成作品（プロダクト）や、スピーチやプレゼンテーション、実験の実施といった実演（狭義のパフォーマンス）をさす。

ルーブリックとは、パフォーマンス課題を評価するツール（評価基準）のうちの一つで、基準（次元）とそれについての数値的な尺度、および、尺度の中身を説明する記述語から構成されている。基準×尺度のマトリックスで、各セルの中に記述語が入るという形式で表現

されることが多い³⁾。

平成26年12月に文部科学省より報告された答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～」の中に、多元的な評価に対応した具体的な手法としてパフォーマンス評価やルーブリックをあげ、具体例を蓄積・共有し、一方で研究・開発の必要性に触れている。

1. 4. 研究目的と方法

そこで、本稿では、児童サービス論の講義形態について、上記の検討者会議の報告のうちの指導項目の中にあげられている事項で、受講生が最も親しみをもっている児童資料（絵本）の多様性と児童サービスの実際（読み語り）のスキルを、理論と実践双方の修得が同時にできるようなアプローチ法を模索した。

まず、パフォーマンス課題として「児童サービスの対象となるいずれかの年齢に応じた絵本の読み語り」を設定し、4から6人の各グループに分かれて個々のパフォーマンス（絵本の読み語り）について相互に意見を述べあい、アドバイスしあうという仕組みを設定した。このグループワークが、アクティブラーニングに該当する。

次に、グループワークで得た収穫や自らの学習の蓄積をもとに、受講生全員と教員（筆者）に向けてパフォーマンス（絵本の読み語り）を実演する時間を設けた。

同時に、パフォーマンス（絵本の読み語り）をする人以外の受講生と教員の全員でルーブリックを用いて評価を行った。その際、評価の観点として、①から⑥の基準（次元）と、それについて達成度をA・B・Cの3段

階に分けた尺度と、それぞれについての記述語を教員が設定した。以下がその内容である。(資料1参照)

① 選書と対象者

選択した絵本が、設定年齢の児童(対象)に合っているかどうか。その効果が考えられているかどうか。

② 声

児童サービスが行われる空間の広さの設定に応じた声量で、抑揚や間の取り方といった工夫が考えられているかどうか。

③ 目線・態度

観客と目線を合わせながら、堂々と読み語っているかどうか。

④ visual aids

絵本の話に合わせてタイミングよく、また効果的にジェスチャーなどを使っているかどうか。

⑤ 発表内容

内容がわかりやすい。聞き手が興味をもてるように工夫が見られるかどうか。

⑥ 質疑応答

事後に受講生や教員から受けた質問に対して、全体的確に答えることができたかどうか。

上記の通り、絵本の読み語りについて設定した学習・評価方法が、理念と実践を結びつけながらより深く有益な学びに向けた取り組みとして実現できたかを検証することを本研究の目的とし、今後の児童サービス論の講義の発展(展開)に資するものとする。

2. 班ごとのグループワーク

2015年度前期の児童サービス論の受講生は、計22名で、所属は発達教育学部5名、現代社会学部8名、法学部9名である。また学年別

では、4回生2名、2回生1名、1回生19名である。

15回の講義のうち、3回目の「児童資料の種類と特色」で絵本を扱い、その理念と種類や選書の意義、活用上の留意点などについて講義した。単位認定の一部要件としてパフォーマンス課題とルーブリックを用いた全員による評価について解説した。

そこに至るまでの過程としてグループワークの提案について教員から主旨説明を受け、受講生は学部で偏ることなく自然に5班に編成された。ちなみに班名は、「しかご」「ささみ」「ぼてと」「ゆのみ」「ねこ班」である。

次回までに読み語る絵本を決定し、まずは個人で下読みないし家族・身近な友人(受講生以外も含む)に試行的に読み語ってみるなどの課題を課した。そののち指定した講義日に各自が選んだ絵本を持参して班内での読み語り(グループワーク)を行うこととした。

この試みについて、講義の最終回で行ったアンケート(無記名)の設問と、回答を下記に記す。

Q. パフォーマンス課題(絵本の読み語り)で、発表前に取り組んだ班活動について、効果や課題を感じたまま記入してください。

A 1. 一度、本を読み聞かせて、内容の感じ方を言ってもらえたので、発表までに方法や効果を考えることができてよかった。

A 2. 他人の評価でなおせたところもあるので良かったです。

A 3. 人に聞いてもらうことで、この辺が少し足りないなどアドバイスがきけて、よかったです。

A 4. 読み方のアドバイスをもらえ、自分の

- ためになった。
- A 5. 始めるまでに時間がかかるのが課題だったかなと思います。でも、自分では気づけなかったアドバイスがもらえたのでとてもよかったです。
- A 6. 本の持つ位置を確認できたのがよかったです。
- A 7. もっとアドバイスし合うべきだったかもです。
- A 8. 他人の意見を聞くことで改善点が見つかった。
- A 9. 練習で読んでみての注意点などを指摘してもらえて良かった。
- A10. 意見交換や他の人の絵本を見て刺激があったので、グループ活動がとても効果的だと思う。
- A11. 班のみんなが見てくれることで、絵本の見せ方など、考えることが出来て、良かった。
- A12. 自分の本を聞いてもらえてる感じがうれしかった。人の前で読む練習ができた。
- A13. お互いに改善点を指摘することができたので、よりよい読み聞かせを目指することができたと思います。
- A14. グループで練習していろいろ発見もあったから楽しかった。
- A15. みんなの意見をきくことができて役立った。
- A16. 自分では思いつかない考えを知れた。
- A17. 自分が読み語りをしている姿は自分では見ることができないので、どのような点を工夫すればより良い発表ができるか理解しやすかった。対象の学年を相談したりすることも出来たので良かった。
- A18. アドバイスがもらえた。
- A19. 何歳向けかどうかを話し合って相談することができる。読む時の状況をみんなと想像することができる。
- A20. 読み語りの題材などで迷っていた際に、グループのメンバーに相談し、客観的な意見をもらえたことで、最終的に自分の納得のいくものに決められて、ためになった。
- A21. 人前で読むのに慣れることができる。
- A22. 大勢の前で発表、読み語りは緊張しますが、班ですることがその予行練習になりました。
- それぞれが選んだ絵本
- いりやまさとし／著『ぴよちゃんとひまわり』学習研究社、2004
- ひがしちから／著『ぼくのかえりみち』BL出版、2008
- 松岡享子／著・林明子／絵『おふろだいすき』福音館書店、1982
- キム・フォップス オーカソン／著・エヴァエリクソン／絵『おじいちゃんがおばけになったわけ』あすなろ書房、2005
- 平田研也／著・加藤久仁生／絵『つみきのいえ』白泉社、2008
- いわむらかずお／著『14ひきのあさごほん』童心社、1983
- はやのみちお／著・ぼっぶ／絵『しらゆきひめ』ポプラ社、2009
- 五味太郎『きんぎょがにげた』福音館書店、1982
- レミイ シャーリップ／著・バートン サブリー／絵『ママ、ママ おなかがいたいよ』福音館書店、1981
- にしまさかやこ／著『わたしのワンピース』こぐま社、1969
- 中川ひろたか／著・村上康成／絵『たなばた

プールびらき』童心社、1997

矢崎節夫／著・高島純／絵『ちいさいおかあさん』小峰書店、1988

エリック カール／作・くどうなおこ／訳『10このちいさなおもちゃのあひる』偕成社、2005

エリック カール／作・やぎたよしこ／訳『ごちゃまぜカメレオン』偕成社、1992

マレーク ベロニカ／著・とくなが やすもと／著『ラチとらいおん』福音館書店、1965

高島那生／著『バナナじけん』BL出版、2012

あまんきみこ／著・二俣英五郎／絵『きつねのおきゃくさま』サンリード、1984

なかやみわ／著『そらまめくんのぼくのいちにち』小学館、2006

レオレオニ／著・谷川俊太郎／訳『ティリーとかべ』佑学社、1990

加古里子／作『だるまちゃんとてんぐちゃん』福音館書店、1967

横山充男／著・狩野富貴子／絵『こねこのおべんとう』ひかりのくに、2009

菊田まりこ／著『いつでも会える』学習研究社、1998

3. 個人個人でひとり練習

グループワークでお互いにアドバイスしあった成果を含めて、ひとりひとりが講義時間以外で絵本の読み語りの練習に励んだ。

この時、ひとりで準備するよりもグループワークでの収穫があったおかげで、指摘された点を意識した、より有意義な練習ができたと言っている。受講生によっては、始めに自身で決めた絵本をとりやめて、違う絵本に替えたという例もあった。

班活動の様子



4. パフォーマンス課題をルーブリックで評価
講義の隙間をぬって、短時間でグループ
ワークを数回重ね、実演と評価の日を迎えた。

受講生はひとりずつ、読み語る絵本の題名
と対象と仮定した児童（乳幼児からヤングア
ダルトまで）の年齢や学年を述べ、パフォー
マンスをスタートした。発表者以外の全員
（教員も含む）は、あらかじめ用意したルー
ブリックで評価を始めた。

この試みについて、講義の最終回で行った
アンケート（無記名）の設問と、回答を下記
に記す。

Q. パフォーマンス課題（絵本の読み語り）
を、ルーブリックを用いて全員（教員を含
む）で評価したことについて、意見を聞か
せてください。

A 1. 評価があることで、他の人の読み聞か
せを聞きながら、自分の改善点を考える
ことができ、次に活かせるので、とて
もよかった。

A 2. 意外と評価するのも難しいなと思いま
した。

A 3. 多くの人の立場から意見をもらえるの
はすてきです。

A 4. 皆のものを評価することで、自分が気
をつけなければいけないという部分も見
えてきたので良かった。

A 5. 実践的なことができ、よかったです。
全員の意見が入るのでフェアだと思いま
した。

A 6. 良い点を真似できるように頑張ろうと
思う向上心が身についた。

A 7. 自分が小さい子供だったらよかったの
にと思った。

A 8. 少し採点しにくい項目があった。

A 9. 評価項目がわかりづらかった。

A 10. 様々な視点から見れるので、とてもい
いと思う。

A 11. 色々な人の評価をして、自分の発表に
足りなかったものなどを、発表すること
ができた。

A 12. 人間なので好みや感情が入ってしまう
評価になってしまった。しかしとても楽
しかった。

A 13. 読み聞かせをしている時にその人の良
い点や改善すべき点をはっきりして良い
と思います。

A 14. 評価が分かりやすく、いいと思う。

A 15. みんな上手でおどろいた。他の人の評
価が気になる。

A 16. 皆、堂々としていてすごいと思いま
した。

A 17. 教員単独ではなく多くの人の意見が反
映されることは良いことだと思います。

A 18. 責任を感じた。

A 19. 評価をすることは好きで、勉強になる。
評価している人を見るのも大切だと思っ
た。

A 20. ただ発表を見ているだけでなく、自ら
も参加して評価することで、一体感が得
られた。また、自分が発表する際に気をつ
ける点なども分かってためになった。

A 21. 実践的であったのでより緊張感をもっ
てできた。相手が子どもではないので反
応が見れないのは残念。

A 22. 自分の発表、読み語りの時はこうしよ
うと、より自分自身の発表に関して考え
ることのきっかけになり、しっかり聞こ
うと思いました。

坂下 直子：児童サービス論におけるアクティブラーニング

パフォーマンス（絵本の読み語り）の様子



ループリックのコメント欄に受講生が記入した内容は、評価の視点を十分に備えたものであった。一部を下記に紹介する。

- ・絵本の効果をきちんと活用して抑揚をつけた間をしっかりと取り、絵本の設定が活かされていた。
- ・聞き取りやすく表情豊かでとても良いが、設定に2～3歳とした意図が少し気になった。
- ・私が座っている位置からは絵本が全く見えなかった。読み手が身体を横に向けると両端の人は見えなくなってしまうのだと改めて実感した。
- ・授業で学習したアニメーションを取り入れていた点がとても良かった。事前にクイズをすると予告したことで、子どもたちの集中力が上がって効果的。
- ・絵本をめくるタイミングが絶妙だった。

受講生は、自分が評価する側に立たねばならないという緊迫感と責任感から、「評価するための資格」を身につけるため、理論を獲得しなければならないという意識のもとに真剣に講義を聴く姿勢が生じた。

松下によると、パフォーマンス課題の評価(パフォーマンス評価と呼んでいる)について、以下の4つの着眼点があげられている⁴⁾。

- ①評価の直接性 (パフォーマンスを実際に行わせて、それを直接、評価する)
- ②パフォーマンスの文脈性 (パフォーマンスは具体的な状況の中で可視化され、解釈される)
- ③パフォーマンスの複合性 (それ以上分割すると本来の質を失うという、一まとまりのパフォーマンスを行わせる)
- ④評価の分析性と間主観性 (そうした質の評

価のために評価基準と複数の専門家の鑑識眼を必要とする)

このうち、④に記された「鑑識眼」について、松下は「パフォーマンス評価では、評価者の主観がはいるので、評価者はパフォーマンスの質を適切に価値判断するための鑑識眼 (connoisseurship) を求められ、また、通常は複数の評価者がモデレーション (moderation) によって『間主観性』を担保することが必要になる⁵⁾」と述べている。

ここでいう複数の評価者が教員と受講生全員にあたり、ループリックはモデレーションのためのツールにあたる。

理論を理解しそれを実践に活かす児童サービスの担い手と同時に「鑑識眼を備えた評価者」として受講生を成長させるために、教員は理論を解説し、実物を提示し、それを用いて模範実演を行う。また、受講生は自身が「審美眼を備えた評価者」となるために知識を修得しようとする。

そこには、差し迫ったオーセンティックな問題を乗り越えるための内的動機付けが生まれる。これこそが、より深いアクティブな学びへとつながっていくと考えられる。

ただ、アンケートにも記されていたとおり、評価を楽しむ受講生から負担に感じる受講生までが存在することや、評価項目の設定について疑問を感じる受講生もいた。評価観点を全員参加で修正していく作業も今後必要であろう。

おおまかには、

- ①全員での評価は、教員のみでの評価より公平 (フェア) である。
 - ②他者の発表を評価することで、自分の実践に好影響がある。
- との感想が得られた。

参考までに、ループリックの集計結果からは、受講生全員が行った評価の平均と教員単独の評価の点数がほぼ一致していた。

このことから、受講生がある一定の水準まで松下の言う「鑑識眼」を備えるに至り、「鑑識眼を備えた評価者」に成長したと考えられる。

また一方で、受講生全員と教員で行った評価の平均点によると、受講生自らのパフォーマンスは全員単位認定の、つまり修得すべき水準に達していた。(もちろんこの課題のみが児童サービス論2単位の認定の全要件ではない)

5. 意義と課題

この取り組みを終えて、下記のアンケート結果から、意義と課題を考察する。

Q. パフォーマンス課題（絵本の読み語り）で児童サービスの理念と実践の理解・修得ができましたか？

という問いに、受講生22名全員が、理解・修得ができたと回答した。その理由として、下記の理由をあげた。

A 1. 1つの絵本の効果をこれまで考えたことがなかったのでよかったから。

A 2. 簡単だと思っていたことが案外難しく勉強になったから。

A 3. 楽しかったから。

A 4. 皆が読んでいるのを見て、良い刺激を受けたから。

A 5. 司書は人と関わるのが大切だから。

A 6. 一度経験したから。

A 7. 実際にしてみることで課題が見つかると思ったから。

A 8. 児童（こども）の視点で考えることができたと思うから。

A 9. 他の人の発表を見て、どのようにしたら良いかなど考えることができたから。

A10. かなり実践的だから。

A11. 絵本の読み聞かせの難しさがよく分かったから。

A12. どんな読み方をしたらいいかわかるかとか考えたから。

A13. よくわかったから。

A14. 読み語りでどのような点に気をつけるべきかわかったから。

A15. 他の人が読むのを見ることができ勉強になったから。

A16. スライドだけでなく実践でも丁寧に教えていただいたので。

A17. 実践することにより学んだことが意識できたから。

A18. 最も大事な児童サービスの1つであると再認識したから。

しかし、以上はあくまでも受講生自身の手応えであり、教員側から見ると下記のような問題点が浮かび上がった。

①パフォーマンス課題である絵本の読み語りについて

- ・対象年齢が幼児から小学生に集中した。
- ・特に乳幼児を対象に設定した受講生の選書にずれがあり、読み語りが長時間に及んだ。

②ループリックを用いた評価について

- ・評価の観点である基準とそれぞれの段階の記述語については、受講生と協議を重ねて改善の余地のあるものがあつた。

・ 形成的評価ではなく総括的評価となったことで、受講生が他者からどのような評価を受け、どの点が改善すべきところだったかという振り返りを行う時間を取れなかった。(フィードバックができなかったことでメタ認知の促進がはかれなかった。)

①の課題については、その原因として受講生にまだ十分な児童の発達段階についての知識が備わっておらず、経験知ではないことがあげられよう。乳幼児の発達についての教員の指導が十全でないことも今後の改善課題として重く受け止めねばならない。

このことは、井上も「乳幼児サービスや発達に触れる講座は少ないままであった。」⁶⁾と指摘しているところである。

また、比較的選書のしやすい年齢に対象設定が集中したことは今後の課題である。0歳～18歳までの何パターンかをまんべんなくどの受講生にも体験できるような課題設定の仕組みが必要だろう。

「絵本の選書はむずかしいといわれるが、その最も大きな理由は、絵本を見るときの子どもの視点とおとなの視点の違いにある(省略)子どもの目線で絵本を見られるようになるためには、子どもと一緒に絵本を読み、子どもは絵本をどう楽しむのかを知るほかはない。」⁷⁾とあるように、児童サービスの担い手となって幅広い年齢の利用者に向けてバランスのとれたサービスを行う術を身につけることが重要である。

おわりに

児童(0歳から18歳まで)の発達段階に応じた図書館資料の種類や、双方を結びつける

方法を、スライドやレジュメ、現物を用いて模範実演も交えながら教員が受講生に理念を解説し、次に、前出の「必要に応じて演習を取り入れる。」とあるように、実践の模倣としてパフォーマンス課題(絵本の読み語り)を行った。その際、個別のみの学びよりもグループワーク(班活動)でのピアラーニングによる意見の交流や学びあい、より一層アクティブに修得が深まることが見て取れた。評価においては、ルーブリックを用いて全員参加で公平性を担保しながら、評価する側とされる側の両方の立場を経験することによって、より深い学びにつながる様子が散見できた。

これらの取り組みから、理論と実践を往還しながら共同で深いアクティブラーニングが実現できた。

今回は読み語りというパフォーマンス課題を設定したが、多種多様な図書館資料ひとつひとつについても汎用性のある取り組みであると考えられる。

受講生がこの点を意識して他の場面でも応用し、今後、公共図書館などのフィールドで、児童サービスを展開していくであろうと考えられる。

謝辞

本研究で取り上げたグループワークやパフォーマンス課題の様子を記録した写真や、行ったアンケートについての回答は、全て該当する受講生の許可を得て掲載したものである。2015年度前期「児童サービス論」の受講生一同に感謝の意を表します。

引用文献

- 1) 小河内芳子『公共図書館とともにくらし』いづみ書房、1980年、pp. 28-29参照。
- 2) 同上書、p. 31参照。
- 3) 松下佳代「パフォーマンス評価による学習の質の評価—学習評価の構図の分析にもとづいて—」『京都大学高等教育研究第18号』、2012年、pp. 75-114参照。
- 4) 同上書、p. 81参照。
- 5) 同上書、p. 82。
- 6) 中村美季・井上靖代・日置将之（他）・平田満子・児童・YAサービス研究グループ『『児童サービス論』養成実態調査3（グループ研究発表〈特集〉第54回研究大会）』『図書館界』65（2）、2013年、pp. 144-150。
- 7) 堀川照代編著『児童サービス論』日本図書館協会、2014年、p. 48。

参考文献

- ・西岡加名恵「パフォーマンス課題の作り方と活かし方」西岡加名恵・田中耕治『「活用する力」を育てる授業と評価 パフォーマンス課題とルーブリックの提案』学事出版、2009年。
- ・溝上慎一「カリキュラム概念の整理とカリキュラムを見る視点：アクティブ・ラーニングの検討に向けて」『京都大学高等教育研究』京都大学高等教育研究開発推進センター、2006年、pp. 153-162。
- ・溝上慎一「アクティブ・ラーニング」とは何か（特集 次期学習指導要領のキーワード「アクティブ・ラーニング」とは何か）『教職研修』43（7）、教育開発研究所、2015年、pp. 86-88。
- ・溝上慎一「アクティブラーニング論から見たディープ・アクティブラーニング」松下佳代編著『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房、2015年、p. 32。
- ・西岡加名恵「アクティブ・ラーニングをどう評価すべきか～西岡加名恵氏に聞く」eduvieview <http://eduvieview.jp/>（2015. 9. 6 確認）
- ・西岡加名恵「ウィギンズとマクタイによる『逆引き設計』論の意義と課題」『カリキュラム研究』（14）、2005年、pp. 15-29。
- ・磯友輝子・坪井寿子・藤後悦子 [他]・坂元昂「絵本の読み聞かせ中の幼児の視線行動：絵本の内容理解とターゲット部分への注視に注目して（コミュニケーションの心理及び一般）」『電子情報通信学会技術研究報告. HCS, ヒューマンコミュニケーション基礎』110（383）、一般社団法人

電子情報通信学会、2011年、pp. 13-18。

- ・日本図書館協会児童青少年委員会・児童図書館サービス編集委員会編『児童図書館サービス1 運営・サービス論』日本図書館協会、2013年。
- ・日本図書館協会児童青少年委員会・児童図書館サービス編集委員会編『児童図書館サービス2 児童資料・資料組織論』日本図書館協会、2013年。
- ・井上靖代「児童・YAサービス（IV. 図書館サービス、〈350号記念特集〉図書館・図書館学の発展—21世紀初頭の図書館）」『図書館界』61（5）、日本図書館研究会、2010年、pp. 469-475。

資料1

発表者 (学部) (氏名) 絵本のタイトル ()		目線・態度	visual aids	発表内容	質疑応答
A	対象年齢と絵本がフイットしており、効果が考えられている。(発達段階と絵本の関係が理解できている)	観客と目線を合わせながら読み語っている。(堂々としている)	話に合わせてタイムイングよく、また効果的にジェスチャーなどを使っている。	内容がわかりやすい。聞き手が興味をもてるように工夫が見られる。	質問に対して、全て答えることができる。
B	対象年齢と絵本の関係に少しズレがあるが、効果設定は合っている。	絵本にところどころ目を向けながら読み語っている。	話に合わせてジェスチャーなどを使っているが、タイムイングがずれていたり、情報が少ない。	内容が少しわかりづらい。聞き手が興味をもつように、工夫が少し必要である。	質問に対して、ときどき答えることができる。
C	対象年齢と絵本がフイットしておらず、効果についても考えられていない。	観客を見ず、絵本を見ながら発表している。	ジェスチャーなどを話に合わせて活用していない。	内容もわかりづらい。聞き手が興味をもてるように工夫が必要である。	質問に対して、答えることができない

コメント
.....
.....
.....